

子どもと共につくりあげるグループ学習 ～コミュニケーションを深めて～

岩沼見奈 小松正和

1. テーマの設定理由

(1) 「グループ学習」について

「グループ学習」とは本校中学部で行っている国語・数学を中心に学習する授業である。年度当初、中学部の教師で個人差や習熟度、子ども同士の相性などを考慮し十分に話し合っ
てグループ編成を行っている。

中学部では昨年度、この「グループ学習」を研究の対象とし、「生活の文脈」を取り入れた「わかる授業づくり」に取り組んできた。

(2) 生徒の実態

本グループは、2年生2名、3年生1名、計3名で構成されており、担当教師は2名である（活動内容によって3名の時もある）。同じ場所に座って学習に取り組むことが苦手であり、その日の体調や気分によって教室に集まれなかったりもする。また教師に思いを伝えることなく活動の場所を離れ、自分の思いがうまく伝わらずにかたくなな態度や表情になることもある。

そこで昨年度は「生徒が物や人とかかわり、そこに教師と一緒に活動することで互いのコミュニケーションをとっていく」ことを本グループのねらいとした。その取り組みによって繰り返し行ってきた活動や、見てすぐにわかる活動にはスムーズに取り組むようになってきた。また生徒の日常生活でよく行う「かたづけ」活動では、「かご」を提示すると自分から行動に移すようになった。さらに生徒の伝えたいことを推測し簡単な言葉で返しなが
らコミュニケーションをとることで、少しずつ言葉でのやり取りも行えるようになってきた。

(3) 今年度の「グループ学習」でのねらい

本グループの生徒の保護者や担任の願いには

- 穏やかに落ち着いて学校生活を送ってほしい
- 自分の気持ちや意志をカードを使って伝えることができるようになってほしい
そしてその種類が少しずつでいいから増えてほしい
- 少しずつ長い時間、椅子に座って学習できるようになってほしい
- 家で簡単な手伝いができるようになってほしい

など、コミュニケーションの面と学習の面の願いが多かった。

そこで今年度は「生徒が見通しをもって活動し、そこに教師と一緒に活動することで互いのコミュニケーションを深める」ことを本グループのねらいとし、昨年度の研究をより深めようと研究の対象に取り上げた。

2. 「さんぽ」の実践

(1) 「さんぽ」の活動について

本校中学部の「生活」の授業の大きな柱として「さんぽ」がある。「外へ出かけるというドキドキワクワクする気持ちを大切にしながら、生徒も教師も一緒に感じながら時間を共有し、同じ発見・同じ体験をすることができる」という視点から中学部では「さんぽ」の活動を重視し、学年毎に取り組んでいる。

本グループの生徒も「さんぽ」は好きである。学校で走ることが多いU男は、「さんぽ」に出かけると教師と一緒に落ち着いて歩く。Y男は学校では好きな音楽が流れるキーボードやCDラジカセ（以下ラジカセ）の前から動こうとしないが、「さんぽ」では嬉しそうにジャンプしながら歩いている。よく「さんぽ」に出かける金曜日、H男は自分から「さんぽ」に出かけたいと意志を示し玄関で準備をして待っている。

そこで

- *本グループの生徒にとって「さんぽ」は好きで身近な活動である
- *「玄関でズックに履き替える→郊外に出かける→学校にもどる」という一連の流れが生徒にとってわかりやすい
- *外へ出かけることで、生徒が「したいこと・やってみたいこと」を自分で見つけ、学校内以上に要求場面が増え、コミュニケーションをとる機会を多く設けることができるのではないか

以上の点からさんぽをコミュニケーションの場と捉え、グループ学習の大きな柱として取り組むことにした。

(2) 「さんぽ」での個人のねらい

「さんぽ」に取り組み、わかってきた生徒の実態から個人のねらいを設定した。

	「さんぽ」での実態	個人のねらい
U男 2年	<ul style="list-style-type: none"> ・決まった教師の肩に手を置いたり、腕をつかんだりして歩く ・自動販売機を見つけるとすぐに「ジュースちょうだい」のサインを出す ・自動販売機で購入することは一人でできる 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな教師と歩く ・「ジュースちょうだい」のサインを出し購入する
Y男 2年	<ul style="list-style-type: none"> ・学校内ではラジカセから離れようとせず、「さんぽ」が唯一の教室以外に出歩く場である ・ラジカセを提示しながら「さんぽ」に誘い出すが、音楽が流れていないと怒り出し、ラジカセを持たすと抱えて座り込む ・教師がジュースを提示すると「ちょうだい」のサインを出す 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の流れるラジカセを持ちながら「さんぽ」へ出かけ、気分を開放する ・「ジュースちょうだい」のサインを出し購入する
H男 3年	<ul style="list-style-type: none"> ・とても速いペースで一人で歩く ・途中で走ることも多く、一度走り出すとなかなか止まらない ・走っているのを止めると、座り込むこともあり、再び歩き出すのにとっても時間がかかる ・お茶がほしい時は、決まった自動販売機まで走り、「おちゃおちゃ」と言って要求する 	<ul style="list-style-type: none"> ・走った時、教師の「止まって」の言葉かけを聞いて止まることができる ・座り込んでから歩き出すまでの気持ちの切り替えをはやくする ・「おちゃ」と言って要求し購入する

(3) 手だてと生徒の実態の変化


「さんぽ」を何度も行ううちに、生徒の実態は変化してきた。その都度、変化に対して担当の教師同士が話し合いをし、個人のねらいや手だても少しずつ変えてきた。



①実物（リュック）提示の「さんぽ」からカード提示の「さんぽ」へ：Y男の場合

「さんぽ」に取り組み始めた当初は、出かけるまでに時間がかかった。その日の気分によって、教室に集まるまでに時間がかかるH男、教室から一步出るまでの気持ちの切り替えに時間がかかるY男、といろいろあった。しかし「さんぽ」へ出かけると、笑いながら飛び跳ねたり走ったり、それぞれが「さんぽ」を楽しんでいた。さらに「さんぽ」へ出かける時は必ず「リュックサック（以下リュック）」を教師や生徒の誰かが持っていた。

そこで私たちは「今からさんぽへ出かけることがわかり、自分たちで玄関へ集合できるようになってほしい」と願い「実物（リュック）の提示」を考えた。

この手だてによって、ラジカセを離さなかったY男の実態がとても変化した。

手だて	Y男の主な実態
<p>* 1 学期</p> <p>「ラジカセ」を提示</p> <p>↓</p> <p>ラジカセを「リュック」に入れながら提示</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師がラジカセを持ちながら言葉かけをすると、「さんぽ」へ出かけるようになった。 ・「さんぽ」では教師がラジカセを持って歩くと、教師と一緒に音楽を聴きながら歩く。 ・はじめはリュックにラジカセを入れようとすると怒っていたが、繰り返すうちにラジカセが見えなくなっても落ち着いて「さんぽ」へ向かうようになった。
<p>教室内でラジカセから一步も離れないことから、ラジカセがY男の行動範囲を狭めているのではないかと考え、教室にはラジカセを置かないようにし、「さんぽ」の時だけ渡し音楽を聴けるようにする</p>	
<p>「ラジカセを入れたリュック」を提示</p> <p>↓</p> <p>ラジカセの入っていない「リュック」を提示</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リュックを見て、「さんぽ」へ出かけるようになる。 ・「さんぽ」の途中で教師の腕をリュックへ引っ張り「デッキをリュックからだして」と要求するようになった。 ・自分でラジカセを持ちながら歩くようになる。 <div data-bbox="486 1142 1125 1288" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>・Y男にとって「さんぽ」は自由に好きな音楽を聴く場となったのではないかと ・ラジカセがリュックの中にあることや「さんぽ」の流れがわかったのではないかと</p> </div> <div data-bbox="1149 1030 1452 1411">  </div> <p style="text-align: center;">ラジカセを持ちながら歩く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当初、「さんぽ」の途中でリュックの中を自分で確認してラジカセがないとわかると、しばらく立ち止まり動かなくなる。 ・しかし出かける時は、リュックを提示すると教室から玄関へ移動する。 ・何度かするうちに、ラジカセがないと確認しても歩くようになり、笑いながら飛び跳ねる様子が見られるようになった。 <div data-bbox="486 1534 1444 1579" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>Y男にとって「さんぽ」が音楽を聴く場から別の楽しみの場になりつつあるのでは</p> </div>
<p>* 2 学期</p> <p>↓</p> <p>「リュック」と「リュックの写真カード」を提示</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リュックを見ただけで、スムーズに自分から玄関へ向かうようになる。 ・自分からリュックを教師に差し出して「さんぽ」を要求するようになる。 <div data-bbox="486 1668 1444 1780" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「さんぽ」がY男にとって音楽以外の楽しみの場になり、自分から要求するほど好きな活動になってきたこと、「さんぽ」のシンボルが「リュック」になったことから、「リュックの写真カード」を提示して「さんぽへ行く」ことを伝えてみてはどうか</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・今までは学校内の場所のカードを提示しても行動へ移すことはあまりなかったY男だが、リュックのカードを提示するとしっかりとカードを見て、自分から指さしをする。 ・繰り返すうちに、リュックのカードを見て玄関へ向かうことも多くなる。 <div data-bbox="486 1937 1444 2049" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>カードによって、「これから行く場所」「いかなくではいけない場所」はわかっているが、Y男の「したい、行きたい」気持ちがカードと一致しないとY男は行動へ移さないのではないかと</p> </div>


手 だ て	Y 男 の 主 な 実 態
<p style="text-align: center;">↓</p> <p>校門に「学校の写真カード」を置く</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・登校後すぐに、自分から「リュック」を持参し玄関へ向かい「さんぼ」を要求するようになる <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>「さんぼ」の時、カードを見るようになったことから、カードを使って「今は学校にいる時」と伝えたらどうか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・学校のカードを指さし「まだ行かない」と言葉かけを繰り返した。繰り返すうちに、カードを見て自分から教室に戻ることも増えた。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div> <p style="text-align: center;">声を出して楽しそうに歩くY男</p> <p style="text-align: right;">校門においた学校カード</p>

このようにY男の変化が見られたが、他の2人も「さんぼ」へ出かける際に、実物(リュック)の提示によって、自分から玄関へ向かうようになった。さらには「リュックの写真カード」の提示によって玄関へ集合し「さんぼ」へ出かけられるようにもなった。

②自由に向かう「さんぼ」から目的地へ向かう「さんぼ」へ：H男の場合

「さんぼ」は生徒がその日の気分などで自由に歩く「さんぼ」であった。生徒が「さんぼ」を楽しめるように、また行きたい場所やしたいことを自分から見つけられるように、さらに教師の「こっちだよ」「ここへ行くよ」という指示的な言葉をあまり使いたくない、という思いからである。

そこで私たちは「自分たちでさんぼをつくってほしい」と願い「生徒主導のさんぼ」を大切にした。その活動を通して生徒はいろいろな要求を出すようになり、コミュニケーションを深める場面が多くなった。特に「さんぼ」の途中でよく走り出していたH男の実践を記す。

手 だ て	H 男 の 主 な 実 態
<p>* 1 学 期</p> <p>歩いている時に「歩こう」、走り出した時は共に走り「H男ストップ」と言葉かけをする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「さんぼ」では、いつも先頭を歩いており、H男の行きたい場所へ向かっている。 ・向かう場所は「のどが渴いた時の自動販売機」「緑地公園」と決まっている。 ・一度走り出すとなかなか止まらず、教師が後追いになることが多くある。 ・少しずつ教師と歩く時間は長くもてるようになったが、走り出すことも多い。 ・「ストップ」と言葉かけをすると座り込むことが多くなり、座り込むと再び歩き出すまでに長い時間が必要であった。 <div style="text-align: right;">  <p>座り込むH男</p> </div>

手 だ て	H 男 の 主 な 実 態
	<ul style="list-style-type: none"> ・ H男は「お茶を飲む」「公園へ行く」などの目的を自分なりにもって出かけており、走り出すことも「はやく行きたい」という気持ちの表れなのではないか ・ その気持ちを「ストップ」と言って止められると、いやな気分になり座り込むのではないか ・ H男が自分から止まる場所を設定するために、H男の知らない道や場所へ行ってみてはどうか
<p>* 2 学期 「市役所」を目的地として出かける</p> <p>↓</p> <p>自分から止まった時に友だちを意識する言葉かけをする</p>	<p>市役所までには信号が多くあり、信号がわかるH男は自分から止まるのでは、さらに市役所には池や小川があり、水遊びが好きな3人は楽しめるのでは、と考えた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師側が目的地を提案しても、今までと同様に笑いながら出かける。 ・ 途中のバス停や信号毎に自分から止まる。 ・ 「友だち待っていてね」と言っても座り込むことなく、笑いながら待っていた。 ・ 友だちを確認するかのように、後ろを振り返る様子も見られた。 ・ 友だちが近くにきたら信号を渡るようになった。
<p>H男と共に目的地を確認し合いながら歩きたい</p> <p>↓</p> <p>「市役所と学校の写真カード」を歩いている途中や止まった時などに一緒に見る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今までカードを見ても手で払いのけてきたH男であったが、提示しても払いのけることをせず、少しずつちらっとカードを見るようになった。 ・ 走り出した時にカードを提示し「〇〇に行こうね」と言葉かけをすると速度をゆるめて歩き出すこともあった。
<p>市役所以外の場所、例えば当初、自分から向かっていた「緑地公園」を目的地にして行ったらどうなるか</p> <p>↓</p> <p>「公園の写真カード」を準備し、公園を目的地にして出かける</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 走り出すことが少なくなり、教師と一緒に歩く時間が長くなった。 ・ 曲がり角で止まり、後ろを振り返り教師と友だちを見る様子が見られた。 ・ 自分の行きたい道の方へ教師の手を引っ張りながら向かうことがあった。 <p>教師と歩く時間が長くなったと同時に、教師への要求の気持ちも生まれてきたのでは</p>





バス停で友だちを待つ

このようにH男とのコミュニケーションを深めるために、「生徒主導のさんぽ」から「目的を教師が提案するさんぽ」へと変化した。その中で本グループの生徒は、行きたい場所やしたいことなど自分の伝えたいことを、サインや言葉で伝えてくるようになった。

③ 飲み物を購入する「さんぽ」からカードで要求する「さんぽ」へ：U男の場合

本グループの生徒は「さんぽ」へ出かけて、自動販売機（以下自販機）を見ると飲み物を要求することが多かった。その要求の仕方やタイミングは個々によって違うが、決まって「さんぽ」の途中で「ちょうだい」と伝えてきていた。

そこで私たちは「伝えたい、ほしい」という気持ちを大切に認め、「自分からサインや言葉で伝えてくるが増えてほしい」と願い「自販機での飲み物の購入」の活動を取り入れた。この活動を通してU男が飲み物をカードを使って教師に要求するようになった。そのU男の実態と手だての変化を記す。

手 だ て	U 男 の 主 な 実 態
<p>* 1 学 期</p> <p>財布を「ジュースなな」と言ってから手渡す</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コーラがとても好きで、必ず飲み物はコーラを購入する。 ・学校や家でコーラのある自販機を見つけると、財布を捜しお金を取り出そうとする。 ・たまに「ジュースなな・・・」と言葉で要求する時がある。  <p>コーラを購入するU男</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペットボトルのコーラを要求し、このコーラのある自販機を見つけると教師に笑いかけ、すぐに「ジュースなな」と言うようになる。 ・繰り返すうちに、飲み物よりもペットボトルに巻いてあるラミネートの方をほしがるようになる。 ・ラミネートは飲み込むことがあるため、教師がタイミングを見て取ると、手に入るまで自販機毎に要求してくる。 ・好きな自販機に教師の手を引っ張りながら向かうことがあり、4カ所ほど場所を覚えている様子である。
* 2 学 期	
<p>要求したらすぐに財布をもらい購入するのではなく、教師と「飲みたい、ほしい」気持ちを確認し合う時間がとれないか</p>	
<p>「コーラの写真カード」を用意し、要求の際に提示する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返すうちに、カードを見ながら「ジュースなな・・・」と言うようになる。 ・さらに自分からカードを教師に手渡し「ジュースなな・・・」と要求するようになった。 ・ラミネートが手に入るまで、怒りながら何度もカードで自販機毎に要求してくる。
<p>コーラの要求が少なくなり、コーラを1本で我慢できるようになれないか</p>	
<p>事前にカードを1枚だけ渡しておき、コーラを1本購入した時点でカードをもらう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1本目のコーラは自分からカードで要求してくる。 ・2本目から「もうカードないからコーラおしまい」と言葉かけをすると、とても怒り出し自販機毎に要求してくる。
<p>・これはU男が伝えたいことを伝えるためのカードではなく、教師側の都合のよいカードの使い方であったため、U男は納得できず怒り出したのではないか</p> <p>・しかしコーラを何本も飲むのは体にもよくないため、何とか1本にならないか</p>	
<p>購入したコーラを目的地で飲む</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・少しずつ我慢する距離は伸びた、目的地でコーラを飲むことも増えた。 ・しかし我慢している間は、声を荒げて怒っていることが多い。
<p>事前に教師側でコーラを準備し、コーラの購入を一度やめてみてはどうか</p>	
<p>目的地(市役所)で「お茶とコーラの写真カード」を使い、コーラを要求する場面を設定する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返す中で、目的地まで怒ることなく向かえるようになった。 ・コーラとお茶の実物とカードを準備すると、しっかりとコーラのカードを選び教師に手渡し「ジュース」と言って要求するようになった。 ・コーラを教師が注ぐこと、友だちと共同で飲むことで量の調節もできた。 ・学校生活全般、家庭生活でもコーラが飲みたい時に、カードで要求するようになった。  <p>カードでコーラを要求</p>

このようにU男にとって「コーラの写真カード」は学校生活全般や家庭生活にも使える物となった。他の2人も飲み物のカードをしっかりと見て選び、教師に手渡して要求するようになり、カードが身近な物になったようだ。

(4) 「さんぽ」から次の課題へ

これまで述べてきたように「さんぽ」の活動を通して、生徒の実態は変化した。自分から教師に「さんぽへ行きたい」と伝えてくるようになったり、カードで飲み物を要求したりと、生徒が好きな「さんぽ」の活動は、互いのコミュニケーションを深めるよい場であったと思われる。

しかし一方で新たな課題がもちあがってきた。Y男は一度「さんぽ」へ出かけると、自分の行きたい場所へ向かおうとし、教師が目的地へ誘うと怒り出したり道路へ飛び出したりする。H男も学校へ帰るときになると座り込む。U男は毎日何度も「コーラの写真カード」を教師に手渡し「さんぽ」を要求するようになった。教師側としては「さんぽが、こんなに生徒がつくり上げようとする活動になった」という嬉しい思いの反面、「次、どのように生徒と折り合いをつけていこうか」という課題を感じ始めた。そこで授業グループ研究会でこの点について話し合いをもち、次のようなアドバイスをもらった。

生徒が「さんぽ」を自分で取り組もうとする気持ちは大切にしていかななくてはいけない。しかし「生活のさんぽ」と「グループ学習のさんぽ」は違う。生徒がつくり上げることも大切だが、目的地や学校へ向かおうとしないことは複雑なことだ。やはり「出かける→目的地へ行く→学校へ戻る」という流れをもっと明確に伝えた上で、どう生徒と折り合いをつけるといいのかを見ていくとよいのではないか。さらに「さんぽへ出かける」活動以外の活動パターンをつくり、そのパターンに生徒がのるためのコミュニケーションの深め方を見ていってもいいのではないか。

このアドバイスからグループ学習の「さんぽ」以外の大きな柱として「フォトフレームづくり」と「てがみ」の活動を考え、授業を行っていくことにした。

3. 「さんぽ」から拡がる学習活動

(1) 「フォトフレームづくり」と「てがみ」について

「フォトフレームづくり」は石、ビーズや木片などの様々な物を自由に選びながらコルクボードに貼っていく活動である。これまで美術の時間に本グループの生徒はポンドに物をつけていく、貼っていく、のせていく活動を行っていた。その生徒にとって、「フォトフレームづくり」は見て何をするのかがわかりやすく、感触を楽しみながら取り組めるのでは、と考えた。

「てがみ」はいろいろな友だちや教師に手紙をだす活動である。ひらがなや漢字のマッチングを、これまでの活動で慣れているシール貼りで行い、自ら取り組みやすい活動であり、手紙のやり取りによって人間関係の拡がりも期待できるのでは、と考えた。

(2) 「さんぽ」からの発展：「約束」

生徒の伝えてきた気持ちを大切に、教師が言葉や写真カードで返していきながらコミュニケーションを深めようと考え、活動毎の写真カードを用意した。生徒が言葉などで自分から思いを伝えてくる場面を設定しようと、「フォトフレームづくり・てがみ」以外に教室以外の活動も認め、「さんぽ」で取り組んできたティータイムも行うことにした。これらの活動の順序は生徒の体調や様子によって臨機応変に変えていくが、「必ず『フォトフレームづくり』と『てがみ』は行う」ということを約束として、取り組んできた。

さらに本グループで行っている「美術」と「職業・家庭」の時間も、見通しがもてるようにと同じ活動の流れで行っていくことにした。

(3) 個人のねらい

活動に取り組み、わかってきた生徒の実態から個人のねらいを考えた。

	個人のねらい	○手だて と ◎実態の変容
U男	<ul style="list-style-type: none"> ・「フォトフレームづくり」と「てがみ」を自分から取り組む ・コーラをほしい時に写真カードを教師に手渡したり、言葉で要求したりして伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ○「ジュース」と言って要求するU男に、教師は活動に関する実物を並べ「作ったらジュース」と言葉かけをしたりカードを提示してきた。 ◎繰り返すうちに実物を並べるだけで自分から落ち着いてジュースを見ながらも取り組むようになった。
Y男	<ul style="list-style-type: none"> ・教師とのかかわりを楽しみながら活動に取り組むことができる ・「フォトフレームづくり」と「てがみ」を教師と一緒に取り組む ・コーラなどがほしい時にカードや実物を教師に手渡したりサインをつかたりして伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ○「フォトフレームづくり」では自分から花柄のビーズを選び、集中して貼っていた。教師が好きなお茶やスルメを提示すると要求のサインを出してきた。そこでY男が見える場所にわざとスルメなどを置き、要求のサインがでたら、その気持ちを尊重してきた。 ◎「フォトフレームづくり」で教師が「もう1枚」とフレームを提示すると、手で押し戻したり作った物を手渡したりして「おしまい」を伝えるようになった。さらに「おしまい」を伝えてから、お茶やスルメを自分から探しだし要求するようになった。
H男	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の声かけで教室に向かい、教室で活動に取り組むことができる ・「フォトフレームづくり」と「てがみ」を教師と一緒に取り組む ・お茶をほしい時に写真カードや実物を見て言葉で要求する 	<ul style="list-style-type: none"> ○教室以外の場所で過ごすことが多く、好きなお茶を提示すると教室に向かっていた。活動には教師が言葉かけを繰り返すと取り組み、作り終わると食堂へ向かっていた。そこで「作ったらお茶」を意識して言葉かけし、食堂へも一緒に向かうようにした。 ◎教師の顔を見ると「おちゃ」といいながら教室へ向かうことが多くなり、教室で過ごす時間も長くなった。活動も実物を提示すると自分から手を伸ばし取り組むようになった。さらに教師に「きゅうしょく」と言ってから、歩いて食堂へ向かうこともあった。

このように活動を繰り返す中で生徒は自ら取り組み、新しい要求の言葉やサインを出してくるようになった。それは毎日の同じ活動の繰り返しにより見通しがもててきたことや、「さんぽ」で生まれた「伝えたい・したい」気持ちが発展してきたものだと考えている。



一人でボンドをつけるU男

4. まとめ

実践を通して、「コミュニケーションを深めるためには、生徒が『伝えたい・したいこと』を見逃さずに拾い上げ、その気持ちを尊重しながらやり取りを進め、活動を共に展開していくこと」「同じ活動を長いスパンで繰り返し行うこと」が重要であることを感じた。

生徒の好きな「さんぽ」の中で「伝えたい」気持ちの手段としてカードを利用したことでカードが身近な物となり、コミュニケーションも深まった。また「さんぽ」で育んできた互いの関係があってこそ、「フォトフレームづくり・てがみ」で自ら活動に取り組み、要求を伝えてきており、互いのやり取りができるのだと思う。

現在、生徒が教師と一緒に「フォトフレームづくり・てがみ」を落ち着いて取り組んでいるが、きっと「さんぽ」のように多くの要求を出してくるであろう。「その時にどう折り合いをつけコミュニケーションを深めるか」「次の活動への拡がり」が今後の課題であると考えている。